

大雨・降ひょうに対する農作物の技術対策について

令和 5 年 4 月 7 日
農林水産部担い手支援課

銚子地方气象台の発表によると、千葉県では、8日夕方から夜遅くにかけて、大気の状態が非常に不安定となり、落雷や竜巻などの激しい突風、降ひょうが発生する恐れがあります。また、激しい雨にも注意が必要です。

については、次の事項を参考に、技術対策を実施してください。

1 ナシ

<事前対策>

- (1) 多目的防災網を展張可能な圃場（人工授粉を実施しているナシ園やミツバチによる授粉が完了したナシ園等）では、多目的防災網を展張し、被害の発生を未然に防止する。
- (2) 排水条件の悪い園では滞水しないよう排水対策を実施する。

<事後対策>

(1) 薬剤散布

ア 葉や幼果が損傷している場合

防除暦を参考に、記載されている農薬を可能な範囲で早めに散布する。

イ 枝や幹に被害がある場合

直ちに枝や幹の損傷部に保護剤等を塗布する（※折れた枝は切り返してから、塗布する）。塗布が遅れると傷の回復が悪く、枯れ込みが多くなる。また、展葉も遅れる傾向があるので、塗布が遅れないようにする。被害面積が大きい場合は、被害程度の大きい園や「幸水」園を優先する。

ウ 疫病対策

降ひょう、雨風によって疫病の感染が懸念されるので、被害後観察を丁寧に行い、発生が見られたら、直ちに罹病枝を切り取り園外に持ち出し、アリエッテイ水和剤 1,000 倍液を散布する。

(2) 被害樹の着果管理

ア 激甚被害園（残存している葉の損傷が 70%以上、または、落葉 30%以上）

⇒全幼果を摘み、樹勢回復に重点を置く。

イ 甚被害園（残存している葉の損傷が 50～70%、または、落葉程度 30%未満）

⇒被害程度に応じた着果量調節

a. 落葉程度 30%の場合……平年の 40～60%の着果量にする。

b. " 20% " …… 60～70% "

c. " 10% " …… 70～80% "

※ただし、樹勢が低下している園では、被害程度に関わらず全幼果を摘む。

ウ 中～軽程度の被害園（葉の損傷はあるが、落葉はほとんど認められない）

⇒ほぼ通常の着果量で良いが、樹勢に応じて加減する。

傷の状態と実止まりが確認できるようになってから、傷が少ない果実を残すように摘果する。被害果が多い場合においてもむやみに被害果を摘果せず、仕上げ摘果に向けて順次摘果を進める。

(3) 被害樹の新梢管理

被害が中～軽程度の園は通常の管理とするが、激甚～甚被害園では当面、摘心、枝の切除等を行わず様子を見る。葉数確保を第一とし、再伸長等が見られる場合、最低限の管理（予備枝先端の1本を残して他の新梢は摘心する等）とする。

(4) その他

園の排水に心がけ、滞水した場合は速やかに排水を図る。

2 施設共通

<事後対策>

○排水対策

- (1) 施設周辺に湛水している場合は、速やかに排水溝を掘り、排水に努める。
- (2) ハウス内に雨水が流入した場合は、できるだけ速やかに排水し、水が引いた後に、ベッドを整形するとともに中耕する。
- (3) ハウス内に雨水が流入する等により、内部が多湿になって病気が発生しやすくなるので、防除指針に従い殺菌剤を散布する。

また、根の活性が低下するなど薬害が発生しやすい状態にあるので注意する。

○突風・降ひょう対策

- (1) 突風や降ひょうによって施設が破損した場合は、安全を確保したうえでビニール等の損傷箇所を早急に修理する。
- (2) 施設内の温度上昇により傷口から病気の侵入のおそれがあるときには、殺菌剤の散布により病害の発生を防止する。また、葉面散布等により生育の回復に努める。

3 野菜

<事後対策>

(1) 野菜共通

○排水対策

- ア 速やかにほ場の排水を図る。
- イ 栽培中の作物には、防除指針に従い殺菌剤を散布し病気の予防に努める。根の活性が落ちるなど、薬害が発生しやすい状態にあるので注意する。
- ウ 栽培中の作物では、土壌の表面が乾いてきたら、追肥用化成などを用いて追肥を行い、軽く中耕を行うことにより、生育の回復を促す。

○突風・降ひょう対策

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので薬剤を散布する。特に、今後の天候によって以下の病害の発生が懸念されるので注意する（カッコ内は病原菌の生育適温）。

炭疽病（22～28℃）、疫病（28～30℃）、べと病（20～25℃）、つる枯病（20～

24℃)、褐色腐敗病(28～30℃)、菌核病 (18～20℃)

(2) すいか・メロン

果実や茎葉に損傷を受けた場合は、薬剤散布を行うとともに、薄めの液肥を葉面散布し、草勢の回復に努める。

(3) ジャガイモ・食用とうもろこし

葉・茎の傷口等から疫病等の発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。

また、被害が軽度のものについては、葉面散布の実施や速効性の肥料を施用して生育の維持・再生を図る。

(4) ねぎ類・にら

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。株が倒伏した場合は、天候とほ場の状態の回復を待って、丁寧に起こす。また、株養成期の畑は、追肥等の管理を適期に行う。収穫期にあるにら畑では、葉の損傷がひどく、出荷が困難な場合は早めに損傷葉を刈取り処分し、新たに葉の伸長を促す。

4 水稻

(1) 移植済みのほ場では、突風や降ひょうに備え深水に管理する。天候が回復したら速やかに排水する。

なお、雨や風が激しくなっている場合は大変危険なため、増水した排水路や河川には近づかない。

(2) ハウス内に雨水が流入した場合は、できるだけ速やかに排水する。

5 麦類

小麦は穂ばらみ期から出穂期にあり、滞水が続くと登熟が低下するため、明渠や排水口に詰まりが無いか点検する。

滞水した場合、溝を切るなどして速やかに排水する。